特集1

高齢者の背中を見せるまちづくり

花夢の里づくり：なつかしい未来をもう一度

畑野川の里づくりグループ　事務局長　**藤目 節夫**

若者・ばか者・よそ者だけでよいのか

まちづくりに「若者・ばか者・よそ者」が必要であるとの通説があるが、敢えてこれに異を唱える気はない。しかしこれだけで充分であろうか。今回の特集のテーマである高齢者はまちづくりに不要な存在なのであろうか。

まちづくりは一定のエネルギーを要する営為であり、ある程度の体力が必要であることは理解できるが、それだけで良いまちづくりができないのもまた事実であろう。体力以上に知恵・英知が必要であり、我々は未来から学ぶことができない以上、それは過去の歴史の英知から学ばなければならない。歴史の英知となれば高齢者の出番であるはずである。ところが戦後の日本では、過去を否定し伝統を破壊することが、人間も社会も進歩に向かっていると見なす軽薄な進歩主義に染まってしまった。これに警鐘を鳴らすべき立場の高齢者は逆に若者に迎合し、それゆえ時代精神は若者たちによって代表され、幼稚化と言いたくなるほどに成熟から離れていった。

そろそろ高齢者の逆襲の時であり、まちづくりはそのための恰好の舞台である。なぜなら、まちづくりの対象の地域は総合的な存在であり、地域を取り扱うには総合的な知見を必要とするからである。総合的な知見となれば、経験豊富な高齢者の出番であることは論を俟たない。

県道沿い400mの菊街道

畑野川の里づくりグループの設立

さて前置きが少し長くなったが、「畑野川の里づくりグループ（以下、里づくりグループ）」の活動をご紹介しよう。久万高原町畑野川地区は、朝日新聞の「にほんの里100選」に選ばれた美しい里だが、他の中山間地域と同様に少子高齢化（人口700人余、高齢化率41．4％）が進み、小田切徳美の指摘する人口・土地・ムラ・誇りの4つの空洞化が見られる地域である。いずれの空洞化も解決困難な課題であるが、ムラ（コミュニティ）と誇りの空洞化はやり方によっては解消可能と考え、平成23年9月に結成されたのが里づくりグループである。加入は世帯単位とし、現在は畑野川の約半数の150世帯が加入している。役員の平均年齢は70歳前後、歴史の英知や総合的な視点を持つにはもう充分過ぎる年齢である。

里づくりグループの結成において確認したことは、①地域コミュニティ全員のまちづくり活動、②暮らしの質を高める活動（経済活性化は二の次）、③外部の人のためでなく地域住民のための活動、を目指すということであった。全員参加を目指したのは、高齢者に何らかの形で活動に関わってもらい、地域における自己の居場所を確認して

みんなで種蒔き

もらうためである。そのために、正会員（すべての活動に関与）と準会員（自宅の周りに花を植える活動だけ）を作り、高齢者が参加しやすい仕組みとした。この準会員制度は、まちづくり活動への高齢者の参加のハードルを下げる大きな効果があった。

花夢の里づくり

ムラと誇りの空洞化の解消のために選んだのが、花による美しい里づくり（花夢の里づくり）である。花によるまちづくりは珍しくないが、ほとんどが非日常空間に特定の花を大規模に植栽するやり方で、目的は観光による経済活性化である。これに対して我々は、日々の生活空間（日常空間）を美しくすること、その活動の過程で人と人がつながりコミュニティが再生されることを第一義と考えた。四季折々の花が咲き誇り、穏やかな時が流れていく山里、象徴的に言えば「なつかしい未来」を畑野川に取り戻したいと思った訳である。花夢の里づくりは経済活性化を第一義としないが、その重要性は充分に認識している。ちなみに、世間では「花（景観）より団子（経済）」のまちづくりが花盛りだが、これからの時代は「花から団子」のまちづくりが結果的に経済に結びつくと考えている。余談であるが、花夢の里づくりは国の「新しい公共」事業に採択された。

まちづくり活動は先ず現状認識のまちあるきから始まった。現状を絵地図にまとめ、まちあるき報告会を開催して現状認識の共有化を図った。次に、正会員により2万本弱の各種の花の種を植え、苗を全会員に配布し植栽してもらった。さらには、会員が挿し木で育てた菊を県道沿い約400mにわたって植栽し、見事な菊街道を育てた。また宇和町の方からは菖蒲、松山市の方からはジャーマンアイリスの大量の球根の無償提供があり、会員有志で採集植栽を行った。

秋のお花マップ

お花まつりの一コマ

昨春には第1回の「畑野川春のお花まつり」を開催した。お花マップを片手にみんなで畑野川を散策し、風景の素晴らしさを再認識した。講演会や愛媛大学法文学部学生によるまちあるき報告会、二十数年ぶりに復活された畑野川万歳の公演、さらには伝統の食文化の試食会も行われた。お花まつりは夏と秋にも実施し、里づくりグループの主要行事となった。広報紙（A3カラー両面）も季刊で発行しており、その内容は花や風景はもとより、「畑野川の名人」や「畑野川の昔むかし」など多岐にわたっている。このような活動はマスコミからも注目され、わずか1年間に5回も新聞紙上で紹介された。

会員によるシンポジウム

高齢者の背中を見せつつ

このような一連の高齢者による活動により、花による美しい景観の創出だけでなく、人と人とのつながりの再生や誇り意識の醸成に多少なりとも寄与したものと思われる。ちなみに昨年末に実施したアンケート調査によると、里が美しくなったと感じる割合は95%、人とのつながりの増加は70%、出歩く機会の増加は53%、里づくり活動を評価する割合は93%など、ありがたいことにいずれも評価が高い。

まちづくりとは地域に生きる希望をみんなで育む営為であるが、これからも高齢者の背中を見せつつ邁進したい。そうすれば、若い世代が歳をとれば引き継いでくれることを願いつつ。